学生が主体的に行う演奏会の継続に伴う課題

―広島大学を事例として―

増　田　朱　音

（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期）

Issues with Continuation of Concerts that Students take the Initiative in:
A Case Study of Hiroshima University

Akane MASUDA

Abstract

Since 2011, students of the Department of Music Education, School of Education, Hiroshima University have been continuously organizing proactive concerts. These concerts comprise advantages such as the ability to perform in small groups and connections that transcend the boundaries of instruments. Conversely, they also engender issues such as a decreased sense of purpose and increased sense of burden in their management. This study aims to clarify issues with continuation of concerts that students take initiative in, explore the factors that caused these issues, as well as obtain suggestions for solving them. The study consists in conducting a questionnaire and an interview survey with the students who participated in the concert, and to analyze the results using methods such as factor analysis. Despite having a positive perspective toward learning and motivation for participation, the students face a sense of challenge in the concert. These challenges could be classified into six categories. The first category concerned bias in instruments and composition, the second regarded a decrease in the number of participants and participating groups. The third lied in the difference in motivation regarding management, difference and balance in workload, time, and burden related to management. The fourth lied in the difference in the sense of purpose among students, the fifth in the ambiguity in the purpose of the concert itself, and the sixth in human relations and hierarchy. It became clear that these factors were related to the diversity of values and experiences, as well as the stereotypical notion of homogeneity. Furthermore, to solve issues, it is necessary for students to recognize that facing the problem-solving process is a part of learning, which is the point at which the characteristics of student-centered concerts can be recognized.

1　はじめに

多くの音楽系大学では，演奏技術向上，ステージ経験，学習成果の発表などを目的とした演奏会が多数行われている。それらは，ソロ演奏，小編成アンサンブル，オーケストラや吹奏楽など，様々な形態のものがある。また，教員によるオーディションを用いたもの，学生間でメンバーを募り行われているものなど，演奏会の在り方も様々である。

広島大学（教育学部音楽科）では，2011 年度から現在に至るまで，木管，金管，打楽器など，それぞれのセクションごとに，学生主体の演奏会が継続的に開催されている。ここでは，授業内では取り扱われない小編成アンサンブルができることや，楽器の枠を超えた繋がりが持てることなど，学生にとってのメリットが見い出せる。その反面，演奏会の継続に伴い，目的意識の低下や形骸化，運営への負担感，参加に対する強制感等の様々な問題が生じ，演奏会の参加が義務的なものに変化していく様子も見られた。

これまで筆者は，学生らが義務感を伴いつつも演奏会に参加し続けることに注目し，そこに学びの意義を見い出すことができるのかという視点で研究を行ってきた。広島大学の学生が行う演奏会のなかでも，継続的に開催されている演奏会を取り上げ，参加学生に対し，普段の授業における学習観と，演奏会への参加動機に関する意識調査を行い，因子分析を中心とした分析を行った。その結果，演奏会の参加に対して，専門的な音楽学習を求める学生よりも，演奏経験を積むことを重視する学生が多いことが明らかになった。また，学びの意義として，①アンサンブル能力の向上・育成，②運営・マネジメント能力の育成，③演奏経験のできる場の 3 つを見い出すことができた。一方，この意識調査では，演奏会間，専科と副科，運営への関与，大学のサークル所属の有無という 4 つの視点において群間比較を行ったものの，大きな意識の差は見られなかった。

これをふまえて，本研究では，これまでに調査した演奏会と共通する性質を持つ他の 2 つの演奏会を分析対象に加え，再調査を行ったうえで，継続性を持って行われてきた学生主体の演奏会における課題を明らかにし，それらの課題が生じた要因を探ることで，課題解決への示唆を得ることを目的とする。

2　調査対象演奏会について

広島大学（教育学部音楽科）に所属しており，2019 年度，調査対象演奏会に代表者として参加した学生を対象にインタビュー調査を行い，そこで得た情報をもとに調査対象演奏会の性質や，代表者から見た演奏会の意義及び課題を明らかにする。インタビュー調査では，「演奏会の概要」「始まったきっかけや当初の目的」「活動状況」「現在の目的や演奏会の意義」「継続に伴う課題」という 5 つの項目を中心に調査を行った。

（1）本研究における「学生主体の演奏会」

広島大学の調査対象演奏会について，インタビュー調査を基にその性質を整理した（表 1）。それをふまえ，次の 3 点に要約できた。

①運営は学生が行っている。主催は学生ではないものもあるが，運営はいずれの演奏会も学生が係分担をし，学生のみで行う。

②教員が何らかの形で関わりを持っている。運営への関与は少ないものの，最終的な確認や出演者のオーディション，音楽的指導などを行うことがある。

③単位化されていない学習活動である。授業のように単位認定されるものではなく，サークル活動として存在している団体でもない。

表 1　インタビュー調査による調査対象演奏会の性質

<table>
<tr><th></th><th>主催</th><th>教員の関与</th><th>募集方法</th></tr>
<tr><td>木管アンサンブル演奏会</td><td rowspan="3">学生</td><td rowspan="2">学生のみでは解決しにくい問題の相談など，出演者のレッスン・助言</td><td rowspan="2">学生間で専科・副科ともに声かけ中心だったが，2019 年度～，募集要項の提示による公募に変更，声かけなし</td></tr>
<tr><td>金管アンサンブル演奏会</td></tr>
<tr><td>弦室内楽演奏会</td><td>演奏者として学生とともに参加，アンサンブル指導</td><td>専科・副科ともに声かけ中心</td></tr>
<tr><td>室内楽演奏会</td><td rowspan="2">教員</td><td rowspan="2">出演者のオーディション審査，出演者のレッスン</td><td rowspan="2">教員によるオーディション</td></tr>
<tr><td>ピアノ演奏会</td></tr>
</table>

（2）学生主体の演奏会の意義及び課題

インタビュー調査を基に，代表者から見た学生主体の演奏会の意義及び課題を整理する。

まず，意義について整理すると，第 1 に，普段できない経験が可能になるという点が挙げられる。授業では取り扱われていない小編成アンサンブルを行う機会や，ある楽器に特化した演奏機会などが確保できる。学生らにとって，演奏機会を確保するための手段として機能しているともいえる。

第 2 に，音楽的，人間的に，視野が広がるという点が挙げられる。普段，関わりの少ない学生同士のコミュニケーションや，学年を越えた交流が可能になり，横のつながりだけではなく「縦のつながり」も築ける。それにより，学びの幅も広がる。

第 3 に，運営・マネジメント能力の向上に伴い，リーダー育成や社会勉強などにつながり，授業だけでは学ぶことのできない学びにもなるという点である。

その他，学外の方々に演奏を見てもらう機会になり，授業では受けることのできない刺激を受けるという意義も挙がった。

続いて，課題について整理すると，第 1 に，楽器および編成の偏りが挙げられる。これは，学生全体の専攻楽器の偏りや，演奏会参加者の減少が影響している。また，このことが，やりたいアンサンブルができない状況や，参加したいという意思がない学生が参加せざるを得ないという状況を生んでいる。

第 2 に，モチベーションの差という点である。これは，演奏面よりも運営面に多く見られ，仕事量のバランスや上級生と下級生との意識の違いなどが原因だと考えられる。

第 3 に，個人の目的意識の違いが挙げられ，モチベーションの差が生まれる原因の一つになっている。

第 4 に，演奏会の目的意識と上級生の説明責任という点である。本研究で取り扱う演奏会では，演奏会自体の目的を明示していないものが多い。この点について，例えば，募集要項を出す際，初めて参加する学生にも分かりやすいような目的の明示や，参加費，練習の時間の目安など，より具体的な説明が不足している。また，毎年，メンバーが変わるため，考えの多様化に伴う演奏会への意識の変容を察知し，それらを考慮していく視点も必要である。

3　演奏会に参加した学生の意識

(1) 質問調査概要

広島大学（教育学部音楽科）に所属しており，調査対象とする演奏会に 2019 年度に参加した学生 44 人を対象に，Google Forms を用いて質問調査を行った。学習観を見るため，対象学生は現役学生のみとした。

質問内容は，「回答者の学年」「音楽系授業における学習観（20 項目）」「参加した演奏会」「参加した演奏会への参加動機（22 項目）」「参加演奏会への課題意識」「演奏会参加において重要視すること」の 6 つで構成されている。

学習観尺度は，三俣・清水（2011）の「大学での学習観尺度」を基に，計 20 項目に再構成し，参加動機尺度は，伊藤（2012）の「英語の授業や学習に関する動機づけ尺度」を基に，計 22 項目に再構成した。これらの質問においては，当てはまる（5）～当てはまらない（1）の 5 件法で回答を求めた。

今回の調査では，対象学生 44 人中 31 人の回答を回収し，うち 4 人は 2 つの演奏会に参加していたため，分析対象は延べ 35 人分の回答とした。

（2）音楽系の授業における学習観

音楽系の授業における学習観尺度の 20 項目全てを用いて，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を実施した。因子パターンの値が各因子で 0.35 以上であった 17 項目を 4 つの因子の解釈尺度とした（表 2）。第 1 因子は「積極的意識」，第 2 因子は「探究的意識」，第 3 因子は「自己成長意識」，第 4 因子は「消極的意識」とし，表 2 に因子負荷量の高い 2～3 項目を記載する。

また，4 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し，それぞれの下位尺度得点を求めた（表 3）。

平均値に着目すると，第 2 因子「探究的意識」と第 3 因子「自己成長意識」が 4.0 以上であり，第 4 因子「消極的意識」の平均値が低いことから，音楽系の授業についてポジティブに捉える学生が多く，消極的な意識を持つ学生が少ないといえる。

学習観尺度の相関をみると，「積極的意識」と「探究的意識」，「積極的意識」と「自己成長意識」，「探究的意識」と「自己成長意識」がそれぞれ，弱いものの有意な正の相関を示した。

これらの結果から，学生らは，音楽系の授業に対して，消極的な意識はあまり持っておらず，自分の将来や学びたいことのために積極的に取り組んでいく，ポジティブな学習観を持っているといえる。

表２　学習観因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ　自己利益（α=.85）				
11.　やらなければいけない、義務的なものである	**-.89**	.24	.14	.39
13.　社会に出るために大事なものである	**.70**	.00	.08	.15
8.　わずらわしいものである	**-.68**	-.21	.41	-.40
Ⅱ　主体的行動（α=.83）				
12.　自分から主体的に取り組んでいくものである	-.13	**.85**	-.21	-.15
19.　物事を深く追求していくものである	-.06	**.75**	.12	-.17
16.　学びたいことや興味・関心を深めていくものである	.22	**.68**	.09	.18
Ⅲ　自己成長（α=.84）				
5.　自分を成長させるものである	.14	-.17	**.79**	-.01
3.　自分自身の成長を手助けするためのものである	.05	.11	**.78**	.01
Ⅳ　目的達成（α=.72）				
2.　卒業するために必要なものである	-.04	.11	-.01	**.79**
1.　与えられた課題をこなすものである	.15	-.23	-.01	**.78**
4.　課題をこなせばそれでいいものである	-.21	-.53	.12	**.60**

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	-	.32	.34	-.16
Ⅱ		-	.42	.17
Ⅲ			-	.06
Ⅳ				-

表３　学習観尺度間相関

	積極的意識	探究的意識	自己成長意識	消極的意識	*M*	*SD*
積極的意識	−	.34 *	.40 *	-.19	3.77	0.65
探究的意識		−	.42 *	-.08	4.26	0.63
自己成長意識			−	-.03	4.50	0.63
消極的意識				−	2.97	0.82

* $p < .05$

（3）参加した演奏会における動機

参加した演奏会における動機尺度の 22 項目全てを用いて，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を実施した。因子パターンの値が各因子で 0.35 以上であった 19 項目を 4 つの因子の解釈尺度とした（表 4）。第 1 因子は「自己充足欲求」，第 2 因子は「経験欲求」，第 3 因子は「音楽的学習欲求」，第 4 因子は「演奏会の外的評価」とし，表 4 に因子負荷量の高い 2〜3 項目を記載する。

因子分析において，周囲からの勧めに関する項目は見られなかったことから，学生らは自分の意思で参加していると捉えることができる。これは，調査対象演奏会における，メンバー募集形態の変化に伴う結果ともいえる。

また，4 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し，それぞれの下位尺度得点を求めた（表 5）。

平均値に着目すると，第 3 因子「音楽的学習欲求」が 4.07 と最も高い値を示しており，授業等で学んだ演奏技術や知識の向上を目的とする学生が多いといえる。次いで，第 1 因子「自己充足欲求」と第 2 因子「経験欲求」がそれぞれ 3.93 と 3.91 で，音楽を学ぶ学生らにとって演奏会への参加は，自己充足感を得る

ことのできる場であり，そのような「経験」に価値を見い出していることがわかる。また，第 4 因子「演奏会の外的評価」の平均値が低い（2.91）ことから，演奏会の外的評価は参加動機にあまり影響していないといえる。

参加動機の相関に着目すると，「経験欲求」と「音楽的学習欲求」の相関が最も高い（r = .70）。また，「自己充足欲求」は，「経験欲求」（r = .66），「音楽的学習欲求」（r = .59）とのどちらにも中程度の相関を示している。さらに，「自己充足欲求」と「演奏会の外的評価」との間では，弱いものの有意な正の相関を示している。

これらの結果から，学生らは，授業内では行うことのできない「演奏会特有の経験」を通して，授業等で学んだ演奏技術や知識を深め，向上させたいと考える学生が多いといえる。また，その動機の背景には，演奏会を「経験」するということに価値を見い出している学生の意識と，自己充足感を得たいという欲求があると捉えることができる。

表 4　参加動機因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ　充実感（α=.93）				
8.　「参加してよかった」という充実感を得ることができるから	**.94**	-.17	.06	.16
1.　演奏活動を楽しみたいから	**.91**	.20	-.17	-.28
5.　自分自身の経験になると思うから	**.86**	.19	.03	-.28
Ⅱ　経験欲求（α=.87）				
11.　社会人になったときにこの経験は必要だと思うから	.06	**.85**	-.20	.06
21.　学びたいことがあるから	-.24	**.76**	.28	.21
14.　視野を広げたいから	-.11	**.75**	.28	-.06
Ⅲ　専門知識習得（α=.9）				
3.　楽器に関する専門知識を習得したいから	.13	-.10	**.94**	-.13
7.　音楽に関する専門知識を深めたいから	-.07	.13	**.84**	.07
13.　興味のある分野を深く掘り下げたいから	-.03	.44	**.62**	-.16
Ⅳ　演奏会の評判（α=.76）				
19.　知名度が高い演奏会だから	-.13	.17	-.25	**.89**
6.　演奏会の評判がいいから	.17	-.06	.22	**.74**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	−	.53	.48	.38
Ⅱ		−	.51	.12
Ⅲ			−	.40
Ⅳ				−

表 5　参加動機尺度間相関

	自己充足欲求	経験欲求	音楽的学習欲求	演奏会の外的評価	*M*	*SD*
自己充足欲求	−	.66 **	.59 **	.44 **	3.93	1.00
経験欲求		−	.70 **	.30	3.91	0.89
音楽的学習欲求			−	.29	4.07	0.98
演奏会の外的評価				−	2.91	1.07

** p < .01

（4）質問調査結果の分析

①学習観尺度と参加動機尺度の関係

表 6 に示す下位尺度得点を用いて，2 つの尺度の相関係数を求めた（表 7）。まず，学習観の「自己成長意識」と参加動機の「自己充足欲求」との間に有意な正の相関が見られた（$r = .54$）ことから，自己充足感を味わうことで，自己の成長を実感していると捉えることができる。また，学習観の「消極的意識」と参加動機の「演奏会の外的評価」との間に弱いものの有意な正の相関が見られた（$r = .43$）。

表 6　学習観尺度と参加動機尺度の下位尺度得点

		M	*SD*
学習観	積極的意識	3.77	0.65
	探究的意識	4.26	0.63
	自己成長意識	4.50	0.63
	消極的意識	2.97	0.82
参加動機	自己充足欲求	3.93	1.00
	経験欲求	3.91	0.89
	音楽的学習欲求	4.07	0.98
	演奏会の外的評価	2.91	1.07

表 7 学習観尺度と参加動機尺度の相関

	自己充足欲求	経験欲求	音楽的学習欲求	演奏会の外的評価
積極的意識	.02	.05	-.17	-.06
探究的意識	.20	.03	-.03	.18
自己成長意識	.54 **	.25	.12	.21
消極的意識	.16	.34 *	.28	.43 *

* $p < .05$　** $p < .01$

②平均値の比較

学習観尺度及び参加動機尺度の下位尺度得点に，「学年」「課題意識の有無」「オーディションの有無」の 3 つの属性で差があるのか，*t* 検定を用いて比較したが，いずれにおいても有意な差は見られなかった。サンプルサイズが小さいことが要因として考えられる。したがって，以下では，統計的な有意差に関わらず，単純に平均値を比較することによって分析を進める。

なお，本研究における「学年」は，下級生は「演奏会当時学部 1・2 年生」，上級生は「演奏会当時 3・4 年生及び院生」とした。

学習観尺度

学年による比較では，上級生の方が「消極的意識」の値が高く，学年が上がると，授業を消極的，義務的に捉える傾向が強くなる。また，「探究的意識」と「自己成長意識」は下級生の方が値が高く，音楽学習に対する目的意識をより強く持っているといえる（図 1）。上級生になってもその意識は一定程度保持されるが，慣れもあり下級生ほどの熱い思いではなくなるのかもしれない。

オーディションの有無による比較では，オーディションありの演奏会に参加した学生の方が，「積極的意識」と「探究的意識」の値が高い。積極的な学習観を持つ学生ほど，オーディションによって出演者が選抜される演奏会に参加する傾向にあり，より高いレベルでの学びを求めているといえる（図 2）。

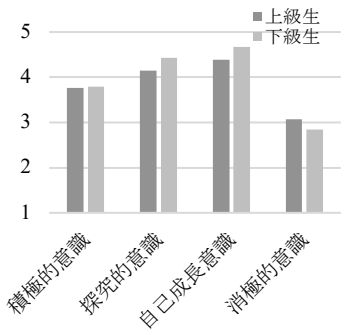


図１　学習観尺度の学年による比較

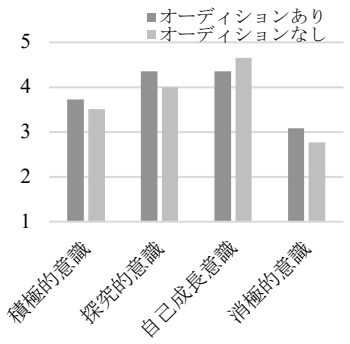


図２　学習観尺度のオーディションの有無による比較

参加動機尺度

「音楽的学習欲求」の質問に欠損値があったため，「音楽的学習欲求」の検定結果は，学年による比較では下級生の度数が 14 人，課題意識による比較では課題意識ありの度数が 23 人，オーディションの有無による比較ではオーディションなしの度数が 9 人で算出されている。

学年による比較では，下級生の値は上級生に比べ全体的に高い。下級生の方が演奏会に参加したいという積極的な意欲があり，演奏会に対する期待や，向上心が高いといえる（図 3）。

課題意識の有無による比較では，課題意識ありと回答した学生の方が，「演奏会の外的評価」以外の項目の値が少し高い。学習意欲の高い広島大学の学生らは，演奏会に対する欲求や期待を持っており，それらが実現できない状況が生まれたことで課題を感じていると捉えることができる（図 4）。

オーディションの有無による比較では，「経験欲求」，「音楽的学習欲求」及び「演奏会の外的評価」の値は，オーディションありの演奏会に参加した学生の方が高くなっている。より音楽的レベルの高い学びを求める学生は，外的な評価も高いオーディションのある演奏会に参加する傾向がある（図 5）。

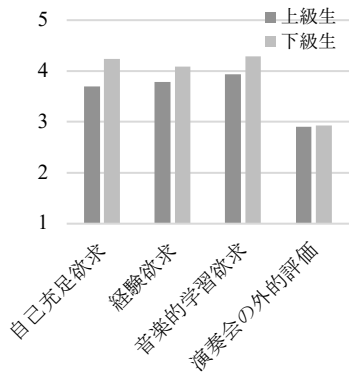


図３　参加動機尺度の学年による比較

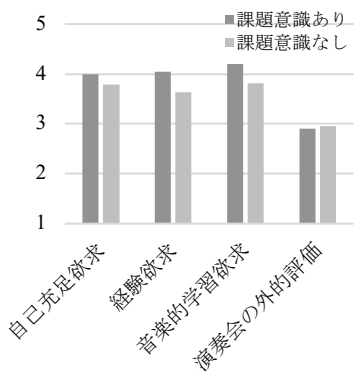


図４　参加動機尺度の課題意識の有無による比較

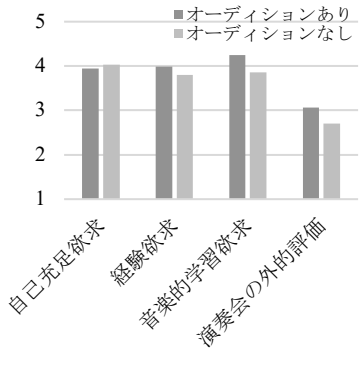


図５　参加動機尺度のオーディションの有無による比較

（5）参加学生の課題意識

「演奏会に参加した際に感じた課題はありますか」という質問では，「あり」と回答した学生が 65%，「なし」と回答した学生が 35%であった（図 6）。

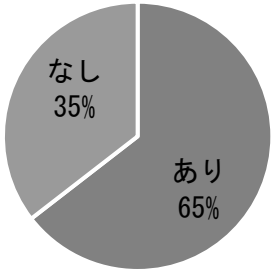


図6　課題意識の有無

続いて，課題の具体的な内容を挙げていく。

1 点目は，演奏会参加者（出演者）の減少である。継続してきたなかで，オーディションに挑戦するメンバーの固定化や，挑戦する団体数の減少という状況が生まれた。それに伴い，特に経済的な面において，運営の限界を感じたり，編成の偏りを問題視したりしている。

2 点目は，運営面に関わる時間や仕事量，負担の差やバランスである。係ごとに仕事内容が異なるため，分担のバランスが悪くなり，学年・個人によって負担度も変わってくる。そのため，負担の均等化を測ったり，負担軽減できる箇所を増やしたりするなどの工夫が求められる。また，運営面でのモチベーションの差も関係している。会議に同じメンバーだけが集まる，発言者が少ないなど，積極的に参加する学生とそうではない学生がいるのも現状としてあり，円滑な運営にならないこともある。

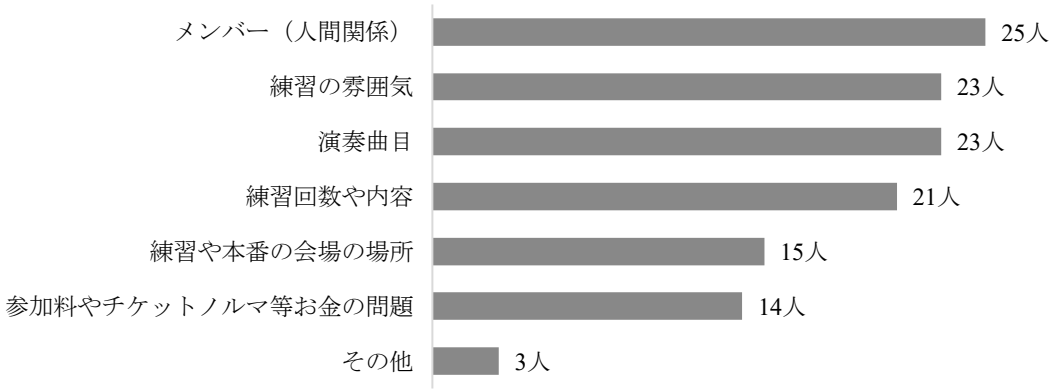
3 点目は，人間関係や上下関係である。具体的には，参加者同士で思ったことを素直に言い合える関係作りや，上級生と下級生との関わり方，学年に応じた役割分担の仕方などが挙げられた。上下関係に関しては，演奏会に対する認識のズレにより，上級生と下級生一方が他方に合わせるべきなのかなど，バランスを取るのが難しいという意見もあった。

4 点目は，モチベーションの差である。まず，学生が演奏会に参加する目的が個々で異なることに着目すると，それぞれにとって最終的に得られるものがあるのかという点が指摘できる。また，演奏会の目的についてのコンセンサスが得られておらず，目的自体も曖昧になっていることに着目すると，参加者が一定のモチベーションを保ちながら，参加者全員で運営していくための工夫が必要である。個人のモチベーションの差は，例えば，毎回同じ人が会議を欠席するといった状況などにも現れている。

その他，演奏会の宣伝方法，知名度・演奏会の場所，曲目や引き継ぎの仕方に課題があるといった内容も少数見られた。

（6）演奏会参加において重要視すること

「演奏会に参加するにあたって重要だと思うことはなんですか？」という質問において，「メンバー（人間関係）」「練習の雰囲気」「演奏曲目」「練習回数や内容」「練習や本番の会場の場所」「参加料やチケットノルマ等お金の問題」「その他」の 7 つの選択肢を設け，複数回答可として回答を求めた。その結果を図 7 に示す。



その他：価値観や方向性がある程度一致すること，人数（演奏会の内容にもよる），宣伝や広報活動の仕方，演奏のみならず運営面でも他者と連携して効率よく公平にやっていく必要がある

図 7　演奏会参加において重要視すること（複数回答）

4　考察

（1）学生主体の演奏会における課題

インタビュー調査及び質問調査で挙がった課題を整理すると，①楽器や編成の偏り，②参加者や参加団体の減少，③運営面におけるモチベーションの差，運営に関する仕事量や時間，負担の差やバランス，④学生間の目的意識の違い，⑤演奏会自体の目的の曖昧さ，⑥人間関係・上下関係の 6 つに分類される。

①②の課題は，これまでの調査では目立たなかったものあり，今後，演奏会が継続することを見据えた上での課題である。

③④⑥の課題は，モチベーションや目的意識，人間関係などがキーワードとなっており，何らかの組織に所属する者は，誰しも感じ得る課題である。特に学生の集まる場では，毎年学年が変わることに伴い，演奏会参加メンバーも必ず変わる。そのため，年度によって程度は異なるものの，必然的に生まれる課題であるといえる。

⑤の課題は，時代の変化に合わせ，少しずつ変容させていく必要があり，継続性に伴う課題であると考える。広島大学における学生主体の演奏会は，当初，演奏機会の少なかった学生らが，演奏機会を増やしたいという思いを持って始まったものがほとんどである。しかし，約 10 年にわたって継続するなかで，上級生がやってきたからやる，という本来的ではない目的が生まれ，結果として，義務感や半強制的な参加，目的意識の形骸化などの問題が生じた。このような過程を見ると，演奏会がどのような目的の下に存在しているのか，学生らにとってどのような意義を見い出せるものなのか，何が課題なのかなど，その時々において見直す必要がある。

（2）課題の要因

因子分析や尺度間の相関より，広島大学の学生らは，音楽系の授業においてポジティブな学習観を持ち，音楽を通した経験や学びを求めて演奏会に参加していることが明らかになった。彼らは，演奏会に対してある程度の期待を持っている学生らであるともいえる。これをふまえ，課題の要因を探っていく。

まず，課題意識を持つということに関して，ポジティブな参加動機を持つことと関連があった（図 2，4，5）。つまり，演奏会に対する欲求や理想，期待が実現できない状況が生まれたことで課題意識を感じているといえる。

①②の課題は，近年の学生全体の専攻楽器の偏りや，メンバー募集の方法を変更した演奏会による参加者数の変化，募集方法変更のような学生主体の演奏会の在り方を見直す風潮が生まれたことなどが要因として挙げられる。また，求めていた経験や学びができない状況は，学習意欲の高い学生らにとって不本意なものであり，そこに課題意識が生じることは，ごく自然なことでもある。

下位尺度得点の平均値の比較において，下学年の方が学習意欲が高いことや，演奏会に対する期待や向上心が高いことが示された（図 1，3）。このことから，③の課題は，インタビュー調査で指摘された，上級生と下級生の意識の違いや，課題意識を持つ学生と持たない学生の意識の違いなどが要因として考えられる。

また，③～⑥の課題に共通して大きな要因となっているのは，「学生の多様性」という点にあるといえる。先述したように，毎年必ずメンバーが変わる環境であることをふまえると，毎年，一定数の異なる考えを持つ学生らが新メンバーとして加わることになる。t 検定において属性による大きな違いは見られなかったことからも，これらの課題の背景には，個々に異なる多様な価値観や，音楽的，社会的な経験を持った学生らが集まるということがあるといえる。

さらに，③～⑥の課題に共通する，もう一つの大きな要因は「一つの組織として同じ方向を向く必要がある」といった一般的な固定概念，すなわち「価値観・経験の異質な集団性」を無意識下に持っていることにある。多様な目的が共存していることやモチベーションに個人差があること，参加者全員で運営していく工夫などの点が課題として挙げられていることをふまえると，みんなで揃えなければならないという一つの概念に束縛されていることが課題の背景にあるといえる。

(3) 課題解決に向けて

これまで，調査によって明らかになった課題とその要因を挙げてきた。本項では，課題を解決するために必要なことは何か，これまでの分析を基に考察していく。

代表者へのインタビュー調査では，曖昧になった目的意識を明確化する必要性が問われた。学生個人や演奏会自体など，目的がある程度定まることで，「何のために演奏会に参加し運営しているか」が明確になる。例えば，演奏技術を向上させる，上級生との関わりをつくる，室内楽の魅力を知ってもらうなど，さまざまな目的が考えられる。参加学生がそれぞれ明確な目的意識を持ち，さらにそれを全体で共有したり，代表者が把握したりすることで，全体としての統一感や，全体の雰囲気のよさにつながるだろう。

また，学生らは，演奏会に対して何らかの課題意識を持ち，その内容を具体的に捉えているにも関わらず，参加学生同士で課題に関する話し合いをしていない。このことを考えると，課題解決に向かうコミュニケーションが不足している点が指摘できるかもしれない。例えば，学生らは，演奏会に対する欲求が実現できない状況が生まれているため，課題意識を感じているということを指摘した（図 2，4，5）。演奏会に参加する際，学生それぞれの求める理想を明確にし，それをふまえ全体の方向性を決める，意見をすり合わせていくことが必要不可欠であろう。学生らが捉える課題は，必ずしも継続性を伴うものではなく，その時々によって起こるものや，常時起こり得るものが多い。その時々の状況に対応していくためにも，事務的な会議だけではなく，意識の共有が可能なコミュニケーションの場を設けることが必要であろう。

さらに，注目したいのは，課題意識を持つ学生がいる一方で，課題意識を持たない学生が 3 割以上いるということである。課題意識に差があることを学生ら自身が気付いているのだろうか。課題意識を持つ人と持たない人では，演奏会に対する熱量が異なってくると考えられる。

参加者は単に音楽的な向上や経験を求めるだけでなく，課題解決のプロセス（課題の把握，共有，解決策の提案，実行）を演奏会参加・運営における学習の一つとして位置づけ，それを認識する必要がある。特に「学生主体」の演奏会にはこのことが求められる。

5　おわりに

本研究では，広島大学における学生の主体的な演奏会の継続性に伴う課題について，各演奏団体へのインタビュー調査や参加学生への質問調査を実施した。その結果，学生らは，ポジティブな学習観や参加動機を持っているにも関わらず，演奏会に対して課題意識を持っており，その要因には，価値観や経験の多様性，同質性を求める固定概念のようなものが関係していることが明らかになった。それらの課題を解決するためには，学生らが，課題解決プロセスに向き合うことも学習の一つとして認識していくことが必要であり，そこに学生主体の演奏会の特性が認められるといえる。

一方で，サンプルサイズが小さかったことで，量的データのみでは解釈しきれない部分もあった。今後は，質的データを収集することも視野に入れ，学生らが学生主体の演奏会における課題をどのように捉えているのか，その意識の背景に着目する必要がある。

参考文献

・伊藤紗織（2012）「英語学習における内発的動機づけと 3 欲求の因果関係」『中国地区英語教育学会研究紀要』42，pp.1-9

・三俣紀裕，清水和秋（2011）「大学進学理由と大学での学習観の測定―尺度の構成を中心として―」『キャリア教育研究』29，pp.43-55